

博士學位論文内容の要旨	
学位申請者氏名	山下 あや
論文題目	エミリー・ディキンソンの詩における「深淵」の諸相
論文審査担当者	主 査 佐伯 恵子 審査委員 金澤 哲 審査委員 鴨川 啓信 審査委員 下村 伸子
<p>本論文はエミリー・ディキンソン(Emily Dickinson,1830-1886)の「深淵」の表象に注目し、その概念に結びつく詩群を広く分析・考察することで、ディキンソンの自己存在への問題意識を探り、その内面に潜む危ういほどの激しい創作のエネルギーを読み解こうとしたものである。</p> <p>ディキンソンは、生涯で 1800 編近くの詩を書き続けた、アメリカを代表する詩人のひとりである。生涯、自らの詩を出版することのなかったディキンソンが詩の原稿をどのように溜めたり回覧させたりしたのかについては、クリスタン・ミラー (Cristanne Miller) による最新の詩集 <i>Emily Dickinson's Poems: As She Preserved Them</i> (2016)とミラーとミッチェル (Domhnall Mitchell) 共編の書簡集 <i>The Letters of Emily Dickinson</i> (2024)をはじめとする最新の研究によってその全貌が明らかにされてきた。ディキンソンの詩の創作に影響を与えたものが様々な指摘されてはきたが、何よりも、自己そのものへの視線こそが彼女の創作を促していたと考えられる。</p> <p>ディキンソンは 16 歳の時に友人に宛てた書簡で、「この世が決して埋めることができないと分かっている、疼く空洞が私の心の中にあるのです」(“There is an aching void in my heart which I am convinced the world never can fill”)(JL10)と述べている。ディキンソンは、天国、神、永遠、不滅といった当時の信仰の規範を信じたい一方で信じきれないという矛盾を抱えた自己、そしてその「心の中」にある「疼く空洞」の存在に向き合い続けたと考えられる。</p> <p>本論序論では、まず最新の研究に基づいて、数々の出来事や人々がディキンソンの詩の創作に影響を与えてきたことを明らかにする。とりわけ従来のディキンソン研究でディキンソンと「深淵」との関係が、主に“abyss”ということばに特化して、彼女の自己の問題、モダニズムの詩との関係の側面などから論じられてきたことに注目する。さらに「深淵」とは表現されていなくとも、ディキンソンが自己存在や生と死、創作などについてその想像を広げ、「深淵」の諸相をつづった詩群があると考えられるため、本論文では、それらを読み取り、ディキンソンが「この世が決して埋めることができない...疼く空洞」とどのように向き合っていたのかについて検証する。</p> <p>第 1 章「ディキンソンの詩と深淵」では「深淵」(“abyss”)ということばが使われている 8</p>	

編の詩を推定創作年代順にとりあげ、詩中での意味の変遷を考察する。日没後の暗闇、死による別れ、神秘の深みを示す井戸など、自然の中にある「深淵」から、死別がもたらす心の痛みや人間の計り知れなさなど、人間の内側にある「深淵」まで、自然と人間双方に潜む底知れない「深淵」の諸相を辿っている。

第2章以降、自然、自己、生と死、恋愛や信仰、詩論などの主題を持つ詩に注目し、それらの中にも表現されている「深淵」の諸相を考察する。

第2章「深淵を認識する」では、ディキンソンの見た自然の世界における「深淵」と、自己の内部に潜む「深淵」を探求している。まず第1節「自然」では、マサチューセッツ州アマーストの美しく、時には厳しい自然を見つめて過ごしたディキンソンが、自然をテーマに書き遺した詩群に注目する。この節では特に夕暮れの後・夏の終わり・光が去った後の3つのイメージに着目し、自然の中に見られる「深淵」のイメージを考察する。ディキンソンは、夕焼けが去った後の日没の完全な暗闇を、ときに「円周」という独自のことばで表現し、美しい夏が過ぎ去った後の余韻の中に「孤独」や手に届かなかった「美」などを見た。そして、光が去った後の完全な暗闇に対して感じる絶望感や喪失感を「至高の苦しみ」などという表現を使い、茫漠と残存する自然の「深淵」を表現した。ディキンソンが、自然には人間の計り知ることのできない驚異・神秘があることを認識し、独自の表現を用いて創作したことを論じている。

第2節「自己」では、自然の「深淵」から自己へと目を向けたディキンソンが認識した「自己の背後に隠れた自己」というもう一人の自己の存在に注目する。“It might be lonelier”(F535)で始まる「半島」ということばが初めて使われた詩の中で、「青い半島」を手に入れずに沈んでいく方が自分らしいと語る語り手が、実は恐ろしいほど強い欲望を自己の内部に秘めていること、また、「青い半島」を初めとする「半島」という語を含む9編の詩群は、苦しみ、孤独、あるいは、抑圧した欲望の暗闇を反転させたような自由や明るさのイメージで描かれていることを考察する。「半島」ということばはディキンソンの「深淵」のイメージのひとつであり、特に「青い半島」ということばは自己に潜む暗く大きなエネルギーを持つ「深淵」そのものを輝かしく表出させ、明るみに出したものであると結論づけた。

第3章「深淵に挑戦する」では、自己存在そのものに計り知れない暗闇が存在することを認識したディキンソンが、自己の「深淵」を見つめ、それに挑戦し克服しようとした過程を考察する。第1節「時間と存在」では、死へと進みゆく時間の概念を、絶対的時間と相対的時間、時間感覚と存在感のずれ、死の時間と永遠との関連性などを表すことばで実験的に書くことで、免れえない死への恐怖を抱く心の奥底の「深淵」を克服しようとしていることを考察する。ディキンソンは、愛を分かち時間や、「何マイルもの無」と表現される無限に続くかに思われる生きながらの死、そして期待しても届くことのない永遠という概念への懐疑、死への絶望的な恐怖などを直視したと考えられる。時間が想起させる死への恐怖を極めて独創的なことば遣いで表現することで、ディキンソンが、消滅してしまいそうな自己存在を繋ぎとめ、死への意識という自己の「深淵」を乗り越えようとしたことを論じている。

第2節「美とことば」では、「美」をことばにする計り知れない苦悩について考察し、詩人が試行錯誤をしながら美をことばにする方法を探索し続けていたことを論証する。美をこ

とばにすることの困難は「音節のない海」という曖昧で独創的なことばで表されていることに着目し、詩人が創る詩的ヴィジョンは熟考され、真実に限りなく近い美を表現していることを考察する。また、虚構ではあるものの、自分の心や読者の心に、受け入れがたい現実に取り替わった束の間の「夢」を届けられる可能性を模索したことも踏まえ、ディキンソンが、詩作の困難に立ち向かう中、美と真実、虚構と現実について徹底した熟考と創作を続け、美へと眼差しを向け続けるその努力の過程こそ詩人としての歓喜を見出していたことを検証している。

第4章「深淵の受容」では、ヒギンズンへの3通目の書簡に、「私は危険な状態にいます」(“I am in danger”) (JL265)、「私は裁きの場を持っていません」(“I have no Tribunal”) (JL265)などと自己の不安定さ、よりどころのなさについて告白していたことに着目し、詩人の自己に潜む、爆発的で危ういほどの創作のエネルギーを読み解く。「家のベスビオ火山」、「火山の生」「私の火山」という表現は、周りには知られていない語り手の本質部分を表し、ディキンソンの秘められた創作意欲が「火山」に投影されていると考えられる。また「銃」や「稲妻」といった表現の中に、ディキンソンが爆発的な創作エネルギーを周りには知られず胸に秘めて明るみに出すことなく持ち続けていたさまを見ることができる。その抑えられたエネルギーは、「深淵」に渦巻く創作の根源として、ディキンソンに詩想を与え続けていた。制御不可能な「もう一人の自己」をディキンソンが受け入れ、詩作の大いなる原動力としたことを検証している。

ディキンソンはその生涯で4通の書簡に「深淵」という語を使用した。死の前々年(1884年)の書簡では聖書(詩編42:7)からの引用と共に「深淵には伝記作家はおりません——いるのなら、それは深淵ではありません——」(“Abyss has no Biographer – Had it, it would not be Abyss –”) (JL899)と述べ、8歳という幼さで亡くなった愛する甥の死に対する悲しみの「深淵」はことばでは表現できない固有の深みだと語る。また、1885年の書簡は、晩年のディキンソンとの恋愛関係が指摘されるオーティス・フィリップ・ロード(Otis Phillips Lord)判事の死後、その従弟に宛てたものである。1874年の父の死から続いて、愛する者の死は、ディキンソンの心の「深淵」をさらに深く抉り、その悲しみは書簡の文面に表れざるを得なかったことが見て取れる。最後の「深淵」は死の前年、義姉に宛てられた書簡で「深淵から現れ、そこにまた入る、それが生でしょう？」(Emerging from an Abyss, and re-entering it, – that is Life, is it not, Dear?) (JL1024)という一節である。シンプルな表現ながら、そこには生と死の苦しみ、永遠・不滅への懷疑と希求といった矛盾や葛藤を、生涯を通して熟考し描ききったディキンソンの生そのものが集約されている。

本博士論文では、ディキンソンが描いた全ての「深淵」(“abyss”)の詩を考察することから始め、詩人を悩ませ脅かす自然の神秘と驚異、自己の奥深くに押さえ込んだ欲望、死への絶望、詩作の葛藤などの「深淵」の諸相がディキンソンに詩的靈感を与え、創作の爆発的エネルギーとなっていた過程をたどり、それらがさまざまな主題を持つ詩の中で表現を変えて創作されたことを論じている。心の中の「疼く空洞」として最初に認識された虚しさがその生涯を通して熟考され、最後には自己の生を端的にまとめ上げる独創的な表現として形を変えるまでの、「深淵」の諸相に光を当てて結びとする。